NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK II — PUDU ALPHA

第２章　法廷の下に眠る法廷

The Court Beneath the Court

プドゥ・アルファで最も古い司法管轄区には、もはや領土が残されていなかった。

その境界は公共事業契約に書き込まれた例外規定や、都市の地役権に手書きで加えられた修正条項、旧水利裁判所の地下壁面に残る淡い鉱物の沈着線としてだけ生き延びていた。地上には、そこにかつて裁判所があったことを示すものは何もない。今は飲食店を何層にも積んだ塔が建ち、その排気が濡れた朝の空気に焦げた砂糖と熱い油の匂いを帯びた帯を描いていた。営

業許可証には「食文化遺産営業権」と記載されている。実際の機能はもう少し複雑なのだと、ナディラはロイに話した。

「入る許可を出せる者は四人いる」と彼女は言った。「三人は死んだ。残りの一人は家賃を集めている」

「必要なのは誰だ？」

「できれば死んだ三人のほう」

ロイはマリアムに渡された古い領収書を見つめた。〈譲渡例外〉という欄に NAR-41 の文字がある。そばには日付、意味の分からない二つの文字、それに小さな蝶番に似た細い印が付されていた。指先には紙の粗い繊維が触れている。製造工程まで見分ける能力をいつの間にか得ているのに、その知識を学んだ記憶は一つもなかった。

「この符号の意味を知っているな」

「意味を書き残した人間がどこにいるか、見当がつくというだけ」

飲食店の外の通りは、交通法規ではなく、人間の存在を証明するための相容れない方式によって車線が分かれていた。社会主

義圏の交通当局は皮質認証書を受け付ける。自由港の商人は保証証券を選び、水利協同組合は説明責任のある消費の記録を要求する。その三者の頭上に、市の横断幕が掲げられていた。『清潔な雨水への平等なアクセスを』。

ロイは最初に検査ドローンに気づいた。屋根付き市場の下を二機一組で進み、人々を測ることを恥じているかのようにレンズを下に向けている。どちらも歩道に埋め込まれた真鍮の線を越えない。障壁があるわけではなかった。市の保険約款にそう書かれているからだ。プドゥ・アルファでは、建築はしばしば物理的構造より先に契約として存在した。

ナディラはパン屋を抜け、年老いた男二人が陶製メーターの真贋について口論している部屋へ入った。二人は彼女がカウンター裏へ回っても言い争いをやめなかった。灰色のコートの女が施錠された冷蔵庫を開け、空のトレーを取り出す。下に階段が現れた。

「四つ目の踊り場より下では、インプラントの発信は禁止よ」

「彼のは発信しない」とナディラ。

「みんなそう言う」

女は初めてロイを見た。身分証は求めず、傷だらけの鋼の鉢に張られた水の上へ左手をかざすよう指示した。鉢の内部の古いランプが水面越しに細い光線を投影した。反射した紋様が手の上を動き、拳の節で崩れ、女には見覚えのあるらしい配置へ落ち着いた。

「降りていい。でも下で決まったことを、上へ訴えることはできない」

ロイは手を引いた。「何を測った？」

「他人の命令を運んでいないかどうか」

「それで？」

「水は教えてくれなかった」

＊　＊　＊

裁判所は一つの部屋ではなかった。判決を下す能力を持った機関が消えた後にも保存されている、一連の決定だった。水はほとんどすべての壁を傷めていた。記録保管者たちは棚の後ろに棚を据え、壁の内側に壁を作り、湿った室の内側へ乾いた室を

幾重にも入れ子にした。各室にはそれぞれ時計がある。二つとして同じ時刻を示していなかった。

狭い廊下の果てに、白いシャツの男が待っていた。髭は異様なほど丁寧に整えられている。左耳には、顔より数十年古そうな損傷した銅製インターフェース。胸に紙の台帳を抱えていた。必要だからではなく、自分がそれを持っていると来訪者に見せるためだった。

「ナディラ・ビンテ・サール。君を迎えるにはずいぶん金がかかるようになった」

「あなたも見つけにくくなったわ、イドリス」

「どちらも同じ市場が生んだ現象だ」

イドリス・ファクリは、かつて有体財産の登記官であり、その後ポスト・デジタル遺産の専門家となり、最後には三つの政府から違法な記録保管者とされた。彼は、廃止後も適用し続けていたその三政府の法律によって犯罪者とされているのだ。二人を卓上ランプ一つのテーブルへ案内した。ランプの横には真鍮板がある。『この先、稼働中の演算装置は禁止』。禁止は慣習と、漆喰の背後に巡らせた古い導電メッシュによって守られて

いた。ロイにはネットワークを検知できなかった。ただし、壁の向こうに少なくとも六人いるのはわかった。

イドリスは台帳を置いた。「NAR-41 は保存文書番号ではない」と、マリアムの紙片を一瞥して言った。

ナディラは腕を組んだ。「では何なの？」

「譲渡不可留保。国家への権原移転も、清算法による処分も認められない遺産物件だ。企業消滅手続きに記載された、そういう例外の四十一番目」

「タイレルか？」ロイは尋ねた。

イドリスの表情は変わらなかった。ただ、台帳の縁を撫でていた親指が止まった。

「その名はこの紙に書かれていない」

「なら、なぜ手が止まった？」

「記録庫でその名を口にする者は、たいてい中身を読む権利まで得たと思い込むからだ」

「俺が必要としているのは治具を持っている人物だ」

「治具は一つではない」

「二セット。旧式の読取装置。どちらも創業者の息子が保管している」

イドリスは正面から彼を見た。「君は誰かにとって危険になるには十分なことを知っている。だが、それが誰なのかを知るには足りない」

彼は台帳を開いた。古い接着剤でページは硬くなっていた。各ページには対になった項目があり、一方は公開の移転記録、他方は非公開の例外規定。公開側には繰り返しの多い、ほとんど儀式のような法律用語。非公開側は管轄印、封印色、廃止された企業住所を組み合わせた暗号だった。ロイは文字を読めても法的文法を理解できない。予測システムは七つの解釈を構築し、イドリスがページをめくった瞬間にそのすべてを棄却した。

「企業が死ねば」とイドリス。「機械は普通、資産となる。負債は交渉の対象となり、人々は証人になる。だが第四の区分を手配する企業がある。遺産の側が譲渡不能だと認めているため、遺産そのものに含まれないものだ」

「機械のような？」ナディラが尋ねた。

「機械を目覚めさせる権限を与える方法のようなものだ」

ロイはいつの間にか天井の換気扇の音を聞いていた。四十二回転するのを待ってから口を開いた。

「受益者は誰だ？」

「書面には『継続における相続人』とある。名も公の住所もない。古い印章で特定された家系の指定だけだ」

「息子のことだ」

「かもしれない。血縁ではなく法的な相続人とも考えられる。裁判所は何世紀もその違いをごまかしてきた」

イドリスは薄い半透明の紙をランプの下へ滑り込ませた。傾けると複雑な透かしが浮かぶ。中心には、互いに背を向けた二羽の鳥に見える小さな図形。その間に一本の縦線があった。

ロイは印を凝視した。末梢処理系のどこかが一致候補を提示し、撤回し、確信度を下げてもう一度提示した。

「見覚えがあるな」とイドリス。

「ない」

「目はそう言っていない」

「俺の目は法的宣言をしない」

「私の目もだ。だが、そのためらいなら前にも見た」

＊　＊　＊

岡京で川村に届いた報告によれば、市の検査班は時計店を発見したという。

報告には店舗の写真、偽造安全証明書二通、真鍮の時計部品の在庫表があった。省が回収を命じた人物の記録はない。検査班は一つの規制権限で階段を上り、別の規制権限で降りてきていた。監督 AI は、許可された検査対象をすべて調べたという理由で任務完了と判定している。

川村は現場指揮官を叱責しなかった。誤りは命令を実行した機械ではなく、与えられた権限の形にある。

「検査前、店は何を送信した？」

「何も」と陳副室長。「外部信号は一切捕捉できませんでした」

「では何を受信した？」

「主に機械式の配達です。水道の請求書が二件。認証されていない紙の配達人が一人」

「その配達人だ」

「スキャンがありません」

「なら、スキャンしない網から利益を得る者を調べろ」

陳は民間地図を開いた。プドゥ・アルファには重なり合う権利主張が藪のように密集している。旧水利地区は、社会主義当局、ARAB 圏の水利営業権者、非承認の自由港議会の三者が共通の例外を認める数少ない区域の一つだった。中立ではない。ただ強制接収するには権利関係が複雑すぎ、費用がかかりすぎるのだ。

川村は地図を閉じ、役所のデータベースではなく施錠された戸棚から紙の附属書を取り寄せた。レイチェルの研究計画に対して、支援母体の公社が解散する以前に発行された助成金の記録だった。いくつかには川村自身の署名がある。初期の記録を見るたび、彼は今でも驚かされた。かつては産業用寿命延長研究

だと思っていた。後にそれは主権の問題となった。製造された意識の稼働を終わらせる権利を、誰が保持するのか。

戸棚にはタイレル遺産管理官の覚書も綴じられていた。二セットの読取治具は清算対象外の有体物として記載されている。どちらも清算財産には入らなかった。保管者の記載は〈T. SUCCESSOR〉のみ。国家が合法的に公開できる座標はなかった。

一つの座標を失うだけで、局全体が一年を費やすことがある。川村は知っていた。同時に、中央行政 AI にその場所を探させたら何が起こるかもわかっている。AI は回答だけを返すわけではない。照会と人工生命ライフサイクル計画を結びつけ、無制限の寿命延長の可能性を見つけ、政府がまだ許可していない比較を始めるだろう。

「今日、治具は必要ない」と川村は言った。

陳は待った。

「必要としている者が誰なのかを知ればいい」

「対象個体は？」

「生かしておけ。適応型スウォームによる終結は禁止。自律尋問も認めない。あれは兵器の試験体ではない」

「省から理由を求められたら？」

「認可制度の欠陥を調査していると言え」

「彼は欠陥なのですか？」

川村は覚書を伏せた。「認可制度に、存在するものを定義する権利があると信じるかどうかだ」

副室長は答えなかった。その沈黙の中で川村は、自分が余計なことを言いすぎた危険に気づいた。

＊　＊　＊

水利裁判所の地下で、イドリスはNAR-41の原本をロイに見せることを拒んだ。

「信用の問題ではない。原本は、我々の誰も保存を保証できないほど古い。触れることは損傷と取引することになる」

「なら複写しろ」

「複写では証拠の系譜が変わってしまう」

「説明しろ」

「この管区では、原本は記載内容が真実であることを証明しない。その記載を行う権限が誰かにあったことを証明する。複写が証明するのは、その文を再生産できるという事実だけだ。バッティ氏。君の問題は権限なのだよ」

ロイは名乗っていなかった。

ナディラも気づいた。イドリスは彼女が気づいたことに気づいた。

「古い証人登録簿だ」と彼は言った。「超自然的なものではない」

「何の証人だ？」

「来訪だ。何年も前、君に似た男がいた。動くことには今より不自由がなく、じっとしていることには今より困難があった。自分の時間の価値を知りたがっていた」

「七という数字はどこかに記されていたか？」

「現存する登録簿にはない」

ロイは待った。その間、頭の中ではヴェイルから聞いた説明が自然に形を成した。古い身体が調べられ、別の身体が作られ、さらに別の身体が作られた。途中の記憶が存在しないことは、治すべき傷ではない。彼が探しているのは製作者と限界であって、意識して生きたことのない歳月を取り戻すことではなかった。

「同行者は？」

「女が外に残っていた。登録はしていない」

「見たのか？」

「靴と、磨かれたメーターに映った顔だけだ。それではほとんど何もわからん」

「それでも言え」

「彼女が見張っていたのは男ではなく、扉だった。男を置いて立ち去る覚悟で来ていたのだ」

イドリスは登録簿を閉じた。「焦っているからといって記録の続きを買うことはできない。だが交換はできる」

「何と？」

「身体に残された変わらない識別子だ。身体を露出する必要はない。インターフェース外装の拓本でいい」

「なぜ？」

「例外規定の原本に、一致する印があるかもしれない。電子回路のものではない。読取治具を認証する封印だ」

ナディラは首を振った。「彼はその身体構造のために追われているのよ。あなたは署名を差し出せと言っている」

「紙の上の署名だ」とイドリス。「ネットワーク信号ではない」

「紙だって持ち運べる」

「監視もできるし、燃やせもする。だから政府は紙を信用しない」

ロイはテーブル、ランプ、記録保管者の手を調べた。力ずくの手段も検討し、捨てた。男は保存する価値のあるものを持っている。証拠と所有を区別する、生きた判断力だ。暴力は、水が原本を破壊するのと同じように、それを壊してしまう。

「拓本を取らせる」とロイは言った。「何と一致するのか見せろ」

イドリスは一度だけ頭を下げた。

三人は銅板を張り巡らせた部屋へ移った。ロイは袖の外側をまくり、左手首の下にある小さな旧式カラーを露出した。目に見える金属は、新しい身体を構成する合成組織や隠れた格子構造と比べれば平凡で、ほとんど粗雑にさえ見えた。イドリスは柔らかな保存用フィルムを当て、木炭の塊を上から押し、静かに剥がした。

痕には接点の列と、小さな七角形のくぼみが現れた。中心には二つの弧をあり得ない角度でつないだ印がある。イドリスは何も言わなかった。長い間そこを見つめ、まるで耳を澄ませるようにフィルムへ顔を寄せた。

「製造印じゃない」

「何だ？」

「保管管理印だ。部品が、それを収めた物件と一緒には売却されないときに付ける類いの印だ」

「誰が所有している？」

「誰にもその質問をさせないために、NAR-41 は書かれたのだ」

＊　＊　＊

スプーンがグラスに触れたような音が銅の壁を伝わった。若い保管係が戸口に現れ、早口のマレー語で告げる。イドリスは二語だけ答えた。ナディラは通訳しなかったが、立ち姿が変わった。

「何があった？」ロイは聞いた。

「上の飲食店に水道監査が入った。三分前。監査官は水道設備を持っていない」

「正規の役人か？」

「私たちを傷つけるには十分正規よ」

イドリスは拓本を引き取り、「監査官は、現存する裁判所協定のどれによっても内側の記録庫へは入れない。だが建物を封鎖して、給水を断って、待つことはできる」と言った。

「もうやっているわ」とナディラ。

一瞬だけ照明が暗くなった。ロイには壁の内部を流れる水の音程が変わるのが聞こえた。下流の弁が閉じ始めている。身体は圧力波を計算し、廊下が浸水する前に二つの施錠扉を破壊する計画を示した。彼は却下した。市の水道から圧力を借りればよい。新しい身体の高価な速度を使う必要は、まだどこにもない。

「紙はどこにある？」

「場所を言えば危険にさらす」

「言わなくても監査官がそうする」

イドリスは反論しかけた。やがて台帳を閉じ、部屋の端へ運んだ。壊れた時計の背後にある金属のハッチは、鍵ではなく重りで閉じてあった。重りを外すと、中に蝋引き布で包まれた薄い引き出しがある。

彼が布をほどくと、折り畳んだナプキンほどの紙が現れた。

下端には二つの封印。一つは法的な縁取りで歪められた旧タイレルの商業紋章。もう一つはロイの手首の拓本と一致した。二

つの封印の間には一つの条項が走っている。ロイは単語を一つずつ読めたが、全体の意味はまるで理解できなかった。

THE HOLDER SHALL RETAIN THE MEANS OF RENEWAL WITHOUT ACQUIRING TITLE TO THE CONTINUITY THUS RENEWED.

「どういう意味？」ナディラが尋ねた。

「読取装置を保管する者は」とイドリス。「それで再起動できる人物を、所有してはならないということだ」

ロイは条項をもう一度読んだ。奇妙に精緻な慈悲なのか。それとも、奇妙に精緻な免責なのか。どちらもあり得た。しかも保管者が誰なのかは解決していない。

イドリスが原本を裏返すと、乾いた水染みの下に、原本よりずっと後に書かれた注記があった。

T. SUCCESSOR — TWO FIXTURES — PRIVATE CUSTODY CONTINUES.

その下には異なるインクでこう記されている。

TRANSFER ROUTE: KUCHING / NONDIGITAL HANDOFF / THIRD-PARTY ESCROW.

ナディラが息を吐いた。「クチン」

「移送経路にすぎん。居住地とは限らない」とイドリス。「移送と、移送されたものを取り違えるな」

上から二度目の金属音がした。飲食店では議論が止まっている。建物そのものが耳を澄ませているかのようだった。

「写しを持ち出せるか？」ロイは尋ねた。

「駄目だ」とイドリス。「持ち帰れるのは君が記憶したことだけだ」

ロイは紙を三秒間見つめた。ある部分は文字の形、インクのにじみ、折り目が投げる影の正確な形まで保存した。別の部分には、信頼に相当する記録は何一つ残らなかった。

彼はテーブルから離れた。

＊　＊　＊

逃走経路は都市の地下を走っていなかった。かつての水時計の内部を通っていた。立ったまま人間が入れるほど大きい。イド

リスが点検板を開くとナディラが先に入り、ロイが続いた。記録庫の外扉ではモーターが蝶番の強度を試し始めていた。

水時計の内部では、釣り合い重りが黒い縦坑を降りていく。かつてこの機械は、計量された水の落下速度から公の時刻を作り出していた。今となっては意味のある時刻を示さない。それでも水は動き続けている。ロイは摩耗した歯車の歯に触れた。市が停止させるべきだったことさえ忘れたために、この装置は今も動いている。

狭い点検通路を上ると古い市場の屋上に出た。貯水槽と破れた太陽光シートの間へ這い出す。夜明けは曇った午後の淡い灰色に変わっていた。下には祈祷所、企業のテラス、貨物高架橋、滴る凝縮器が無秩序に広がっている。電子看板が、リースされた人工身体に対する政府認定の六年間保守保証を宣伝していた。その下では制服姿の子どもが白いチョークでコンクリートに鳥を描いていた。

ロイは子どもの手を見た。その一つ一つの動きには時間が必要だ。政府はいつの日か、その時間を計算し、規制し、終わらせるかもしれない。省の政策の詳細は知らない。ただ彼自身がか

つて固定された寿命を与えられ、その内側で死んだことは知っていた。今、遺産条項は再生の方法を記載し、その保管者が再生された存在を所有することを禁じている。

ナディラが彼の後ろで屋根を横切った。

「クチンは近くない」

「答えも近くない」

「今夜は行かないわよ」

「なぜだ？」

「誰かがあなたの訪問を予測して水利裁判所を閉めようとした。すぐ出発すれば、相手が用意した経路をそのままたどることになる」

ロイは検討した。理にかなっている。何より、受け入れても失うものがない。

「どうする？」

「旧河川地区にエスクロー仲介人がいるの。誰も財産だと認めたがらない権利を買い取る男。治具が第三者保証の下でクチンを通ったのなら、プドゥの誰かが輸送費を払ったはず」

「教えなかったら？」

「どんな質問が危険なのかを聞けばいい」

はるか下で市の回収部隊の一体が飲食店の入口から出てきた。もう一体が続く。通りをスキャンし、屋根の上は見なかった。ロイは身体が十二通りの攻撃経路を準備するのを感じた。どれも優雅で、短く、破滅的に不要だった。彼はそのすべてが消えるのを許した。

もう一度、古い水利裁判所に目を向けた。国家に認められなくなった地下室で、死んだ企業は、意識を再起動する力と、それを所有する権利との間に線を引こうとしていた。その線が守られたのかどうかはわからない。線を引いたのがタイレルの法律家なのか、相続人なのか、それともその誰からも逃れた者なのかさえわからなかった。

今はその線を追えばよかった。

再び雨が降り始めた。今度はロイも、その音を、自分が最後に聞いたものと取り違えなかった。